

第 12 回

こんな時代にロシア語のすすめ

「キシニョフへと向かう列車で」

先日、ポルトガル留学から戻って来た T さんと飲みながら話をいろいろ聞きました。帰国直前はしばらくヨーロッパを巡ってきたそうで、彼はその旅の模様を、留学中の経験と同じくらい楽しそうに語ってくれます。精力的に多くの国を廻り、中にはわたしがその昔訪れたことのある国や都市もありました。

「チャーチャ（ロシア語で「おじさん」のこと、わたしは学生にこう呼ばせている）もそういう国に行ったことがあるのですか？」

うん、でもソ連時代だったし。

「えっ、ソ連に行ったことがあるんですか！ 凄いなあ。ボクにとっては、ソ連って歴史の教科書でしか知らない世界ですよ」

まあそういうけど、当時はそれしかなかったんだよね。

「チャーチャはいったい、何か国を訪れたことがあるのですか？」

う〜ん、実はその質問が、これまた困っちゃうんだよ。

はじめてソ連を訪れたのは 1985 年の夏でしたから、ちょうど 40 年前になります。大学 2 年生だったわたしは、リュックサックを 1 つ背負って 1 か月くらい旅をしました。目的は外国語を使うこと。当時はロシア語の他にセルビア・クロアチア語を熱心に勉強していたので、ソ連とユーゴスラビアを訪れて、自分の語学力を試してみたかったです。

このうちソ連内は、いま思い出しても奇妙なルートを選びました。まず横浜港から船でナホトカに出ます。そこから鉄道でハバロフスク。この辺りは当時の「貧乏旅行」の定番ですから、同じルートを辿る日本人やヨーロッパ人の仲間がたくさんいました。問題はハバロフスクから先です。多くがモスクワへ飛行機で向かうのに、わたしだけは直行便でキエフへ飛びました。ウクライナの首都に数泊してから、列車でモルダビア共和国の首都キシニョフに行き、それからウクライナに戻ってオデッサ、さらに船で黒海を抜けてギリシア、そしてユーゴスラビアを目指したのです。

つまり、モスクワもレニングラードも行きませんでした。はじめてのソ連旅行だったら、この二大都市はふつう絶対に欠かせません。でも当時のわたしはこう考えました。この先もロシア語を続けるつもりだから、モスクワやレニングラードはいずれ必ず行くだろう。今回なんにも焦ることはない。そ

黒田 龍之助

キシニョフの公園で撮影した像。台座にあるのはキリル文字



れよりも本などを通して懂れていた、ちょっとマイナーな地域を目指すほうが面白そう。それで、こういうルートにしてみましたのです。

この予測は見事に当たりました。モスクワやレニングラードはその後で何度も訪れることになりますが、キシニョフとオデッサは後にも先にもこのときだけ。キエフ→キシニョフ→オデッサは、詩人プーシキンが流刑されるちょうど逆ルートだなあ。そんなことをのんびりと考えながら、一人旅をしていました。

キエフからキシニョフへの移動は、昼間の列車でした。はじめての海外旅行で、しかもいろいろと制約のあるソ連の旅でしたので、旅程は予め、日本のソ連専門旅行社（当時はまだ JIC がいない）に組んでもらってありました。指定されたコンパートメントに案内されると、他に旅客はなく、それどころかわたしの車両には、ほとんど人がいませんでした。ところがしばらくすると、団体客らしい一行がドヤドヤと乗り込んできました。そのうちの一人がわたしのコンパートメントに入って来ます。聞けばこの一行のガイドだそうで、一人ぼっちのわたしにロシア語で話しかけてくれました。こういうことは一人旅だとよくあるのです。そのうちに、他の人たちがいる隣のコンパートメントへいっしょに行こうよ、ということになりました。ソ連の地方都市に住む人にとっては、外国人が珍しかったことでしょうし、それがロシア語を話す日本人ともなれば、興味津々に決まっています。

隣のコンパートメントには、おじさんやおばさんが所狭しと舐めき合い、若い人は廊下に立ったまま談笑していました。聞けば皆さんモルダビア人のようでしたが、中にはウクライナ系の人もいて、考えてみればソ連という同じ国の中ですから、不思議ではありません。とはいえ、ロシア語ができる人は限られていました。ウクライナ語ならできる人がいましたが、中にはモルダビア語しか話せない人もいます。モルダビア語はルーマニア語にとっても近いロマンス系言語ですが、わたしはどちらも知りませんし、スラブ系ではないので推測もできません。盛んに話しかけてくるのはウクライナ系のおばさんで、彼女は「わたしはロシア語もできるから大丈夫」と

いのですが、わたしが習ったロシア語とはだいぶ違って、たとえばガ行音がハ行音になるので、新聞 *razeta* も「ガゼータ」でなくて「ハゼータ」になってしまう。万事こんな調子で、聴き取りには苦労しました。

しかしコミュニケーションというものは、教室で習う言語のみによっておこなわれるわけではありません。おじさんもおばさんもわたしに矢継ぎ早に質問しながら、リンゴやチューインガムをくれました。すでに二十歳だったのですが、よっぽど子どもに見えたのでしょうか。リンゴを食べる食べるといので、皆さんの目の前で丸かじりしますと、ソ連のリンゴらしく酸味のある好みの味。美味しいなあと思っていると、次の質問が飛んでくるのですから、落ち着いて食べている暇がありません。中には質問したい気持ちが勝ってしまい、モルダビア語で話しかけてくる人もいました。だからできないんだってば！ 困っていると例のおばさんが、ウクライナ風のロシア語で説明してくれます。それを頑張って理解して、ロシア語で一生懸命に答えるのですが、そうするとリンゴのほうがお留守となり、またしても食べろ食べろです。

質問の内容は他愛のないもので、日本のどこからきたのか、どうしてロシア語を勉強しているのか、兄弟はいるのかなど、ロシア語会話の授業で習ったようなものばかり。両親の年齢を聞かれたので、これも難なく答えました。するとおばさんは「あら、お父さんのほうが年下なのね」といいます。そうですよと答えたのですが、なぜか一瞬シーンとしました。あれ、それって一般的じゃないのかな。するとおばさんが元気よく「まあね、あたしの亭主も年下だからさ！」とあって、その場が和みました。さらにはその年下の亭主が、何も知らずにコンパートメントに顔を出して、一同爆笑に包まれたわけです。

考えてみれば、ロシア語を使ってロシア人以外と会話する経験は、このときがほぼはじめてでした。いただいたガムは後で食べたのですが、フレーバーが分離している微妙な味だったことは、今ではよい思い出です。

これがわたしの初海外旅行ですが、さて、ここまで何か国を回ったのでしょうか。現代の目から見れば、ナホトカとハバロフスクはロシア、キエフとオデッサはウクライナ、そしてキシニョフは現モルドバ共和国ですから、3つの国を巡ったこととなります。でも当時は1つの国。ビザも1枚だし、通貨も同じ。都市間の移動だって、飛行機も鉄道も、すべて国内便だったのです。それが今では、国名や都市名までが変わってしまいました。

お分かりですね。わたしは訪れた国が数えられないのです。ソ連だけでなく、ユーゴスラビアで訪れた4つの都市は、今ではすべて別の国々。だからわたしにとっては、何か国を巡ったかと数えることが、まったく意味がありません。それよりも、誰と話したかのほうが大切で、ロシア語一つ取っても、そこからいろんな人と交流ができたことが、密かな自慢なのです。

<日ロ交流情報>



ロシア文化フェスティバル 2025

4月21日、オープニングコンサート

4月21日、ロシア文化フェスティバル 2025 IN JAPAN のオープニングコンサートが、東京・銀座ブロッサム中央会館で開催されました。シュビトコイ・ロシア組織委員長とともにあいさつに立った栗原小巻・日本組織委員長は、「芸術・文化の感動が日露両国民の心を通わせ、相互理解と相互交流の発展を促す。困難な中でも文化交流、芸術は、決してひるまない」と力強く述べました。

サンクトペテルブルグ音楽会館から派遣されたロシアの若手演奏家（ヴァイオリン、フルート、ピアノ）と日本の演奏家が競演。ラフマニノフ、プロコフィエフ、ストラヴィンスキーなどの楽曲を演奏し、観客を魅了しました。

ロシアの楽曲が主に演奏される中で、唯一日本の楽曲として、坂本朱さん（メゾ・ソプラノ）が、1960年代ベトナム反戦運動で盛んに歌われた「死んだ男の残したものは」（武満徹作曲、谷川俊太郎作詞）を力強く歌いあげたのがとても印象的でした。

露日協会会長ガリーナ・ドウトウキナさん来日

5月20日に文化講演会&歓迎会



ロシア文化フェスティバル 2025 の公式プログラムで、露日協会の会長で作家・翻訳家でもあるガリーナ・ドウトウキナさんが5月19日から来日し、20日に東京のロシア大使館で